

21世紀COEプログラム



インターフェイスの人文学

鷺田 清一*

大阪大学における人文科学研究を担当する部局(「大学院重点化」以前の名称で言いますと、文学部・人間科学部・言語文化部)は、これまで一貫して、学問の進化と社会の時代的要請とに機敏に対応するかたちで、新しい学問領域の開発に努めてきました。すでに1970年代に人間科学部・言語文化部の設置(以後、全国で同名の学部や専攻が続きました)、さらに文学部内には全国でも群を抜く規模の総合的な芸術学講座・日本学講座の設置をおこないました。1990年代には、人間科学部にターミナルケアの研究をおこなう臨床老年行動学講座、阪神大震災の後には速やかにボランティア人間科学講座を設置し大きな注目を浴びました。その後三部局はそれぞれ「大学院重点化」というかたちで、大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科に衣替えしました。同時にその文学研究科に、本プログラムの準備措置ともなる広域人文学講座も設置しました。

さて今回、21世紀COEプログラム(人文科学分野)の研究プロジェクトとして立ち上げた《インターフェイスの人文学(Interface Humanities)》はこの「行動する知」ともいべき大阪大学人文学の精神をさらに発展させるもので、文学研究科12名、人間科学研究科6名、言語文化研究科1名が、研究スタッフとして参加しています。このプロジェクトは、単一の専門領域で研究を深めるというのではなく、人文学の研究体制全体をいわば時代に即応したものに交換するために、人文学のあり方をメタレベルからとらえなおしつつ具体的に研究・実践するという点で、他大学の、研究内容をテーマ的に特化したプログラ

ムと比べても、異彩を放つものです。

従来の人文学研究は、その編成と研究姿勢に関していえば、これまで二つの大きな特徴をもっていました。歴史であれば西洋史、東洋史、日本史、文学であれば英文学、フランス文学、中国文学、国文学というふうに、研究が国家や地域、言語圏によって分割され、その縦割りの制度のなかで、主として研究室内での文献研究を中心に遂行されてきました。しかし「ひとつ」の文化というのも、じつは内外の異なる複数文化が接触し、摩擦や軋轢を生みつつたがいに深く越境するなかで複雑に生成していきます。とりわけ現代のようにグローバル化が急速に進行した時代には、文化や社会の問題を考えるにも、そうした諸文化のインターフェイスの視点が不可欠です。また、それぞれの国家や地域の内部でも、民族間、マジョリティとマイノリティ、「官」と「民」、専門家と一般市民等のあいだでさまざまな文化摩擦や軋轢が顕在化しつつあります。縦割りの制度と文献主義という現在の人文学の研究体制では、そうした国家間・地域間の文化的インターフェイスの相を考察し、さらに現代社会で起こっている諸問題に機敏に適切にリンクすることは困難です。プロジェクト《インターフェイスの人文学》はこうした現在の人文学の限界を突破し、自文化と異文化、専門研究者と非専門の一般市民とのあいだを縦横につなぐ「行動する知」、人文学のそういう21世紀のふさわしいあり方を模索し、実践するために計画されました。

以上のような目的に沿って、大阪大学は先の大学院3部局のなかから、それも地域横断的にかつ社会連繋的な研究を国際レベルで遂行してきたメンバーを選び、《インターフェイスの人文学》研究に取り組むことにしました。もういちどその目的を明確にしておきますと、文化の生成を諸文化のインターフェイスの相でみることに、そのために人文学の縦割りのしくみを領域横断的でダイナミックな研究体制に変換すること、そして人文学研究を現代社会に有機的にリンクさせること、この2点です。



* Seiichi WASHIDA
1949年生
1977年京都大学大学院文学研究科・哲学専攻・博士課程修了
現在、大阪大学大学院文学研究科、教授(臨床哲学)
E-Mail washida@let.osaka-u.ac.jp

この2点をわたしたちは、水平軸と垂直軸、〈横断的な知〉と〈臨床的な知〉というふうに表現しています。〈横断的な知〉というのは、異なる複数文化のあいだの接触や交叉や軌轢を国家・地域横断的にとらえてゆくもので、〈臨床的な知〉とは、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋してゆくものです。このような二つの知を核とするものへと現在の人文学を構造変換し、水平・垂直それぞれの軸において、複数文化の錯綜のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい21世紀型の人文学をデザインすること、それをこのプログラムは狙っています。

より具体的に言いますと、現在の初動段階では、七つの研究チームを編成しています。まず、《インターフェイスの人文学》の理念と方法を研究するチーム「岐路に立つ人文学」。これがプログラム全体を統括します。これを理論班としますと、これとは別に《インターフェイスの人文学》のモデル研究をおこなう四つの研究グループを設定しています。

〈横断的な知〉のモデル研究としては、「交錯する世界」(陸と海のシルクロード、トランスナショナリティ研究の二班で、世界史ならびに現代世界にみられる広域的な地域ネットワークの複雑な生成過程を分析します)、「縫合される日本」(イメージとしての日本文化、言語の接触と混交の二班で、日本を軸とする東アジアの諸文化の横断と越境の過程を分析します)、「越境する芸術・文化」(映像人文学という新しい方法を使って、メディアという視点から文化の越境性について考察します)がすでに活動を開始しています。

〈臨床的な知〉のモデル研究としては、「臨床と対話」グループが、多元化する現代社会のなかで、専門家と一般市民、マジョリティとマイノリティ、ジェンダー、世代間など、異なるコミュニケーション文化圏に属する集団がインタラクティブに理解しあい、議論する新たなコミュニケーションの形態を、ケアやボランティアにおける〈臨床的理解〉の深化と、公共的意思決定のための〈公共的対話〉の条件の探究というかたちで、研究を開始しています。

大阪大学の人文科学研究は、先ほども述べましたように、時代に即応した新しい学問領域への挑戦という伝統をもつとともに、専門家と非専門家とを双方向でつなぐ社会的なアクション、いわば人文学と

社会とのインターフェイスをめざして、積極的に活動してきました。それは市民向けの古典講座などではなく「行動する知」とでもいうべきもので、日本のホスピス運動の先駆者である柏木哲夫教授の臨床死生学、ボランティア人間科学講座や人類学講座を中心とする災害支援、国際医療協力、多文化教育や難民問題の研究などの国際協力活動、臨床心理学講座のカウンセリング、そして東洋史、民俗学、日本語学や民族芸術学などの大規模なフィールド調査、臨床哲学というかたちで哲学の思考とケアや教育などの社会の現場をつなぐという、学会でも注目されるユニークな試みなど、つねに現場の支援に具体的にかかわる学問分野を設置してきました。このように、現代社会のさまざまな問題の渦中に深く身を浸すとともに、大学外の多様な知の場所と緊密で開かれた双方向的なネットワークを形成するという大阪大学人文学研究の精神を、これまで以上に活性化するというのが本プログラムの目的であり、ここにこそ本プログラムの社会的意義もあります。

これと並行して、《インターフェイスの人文学》、とりわけ〈横断的な知〉と〈臨床的な知〉を将来、中心となって推進しうる人材の養成にも力を入れます。日本文化および東アジア文化の研究をおこなう若手研究者(これは東アジア出身の研究者にはかぎりません)の中期招聘と本学大学院生の海外派遣を活性化するとともに、広域的な地域研究のプログラムを円滑に実施するために、アジア各地の研究・教育機関に海外教育拠点を設置します。そのことで、通常外国研究者・日本研究者とは異なる、深い専門性と研究対象地域に局限されない広い視野とを併せ持つ人材を養成し、大阪大学を、多様な世界を広く視野に入れた日本研究や人文学の人材養成拠点とすることをめざします。臨床ならびに現地調査やフィールドワーク遂行の能力養成のために臨床実習・フィールド調査の多様な訓練プログラムを組んで、文化行政、マスコミ・出版、中等教育、国際交流などの現場との連携を強めることもめざしています。そしてそれらの全体を支えるかたちで、衛星通信を中心とする通信インフラを研究・教育の支援のために整備する作業もすでに開始しました。一例をあげれば、紛争下のアフガニスタンからの沿革授業の実験を進めています。

大阪大学の人文科学研究の大きな飛躍にご注目いただきたいと思います。